

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

*東京天文台が登場する小説「金環食（松本清張）」

何度か「東京天文台が登場する小説（文芸作品、あるいは書物）」ということで記事を書いている。振り返ってみると、アーカイブ室新聞第304号「国立天文台（東京天文台、緯度観測所）が登場する小説などの収集：土星を見るひと（椎名誠著（新潮社）」（2010年3月31日）、342号「国立天文台（東京天文台）が登場する小説：「波の塔」」（2010年6月1日）、第356号「東京天文台が登場する野尻抱影の「星三百六十五夜 夏」を発見」（2010年7月5日）、第360号「武蔵野の天文台」（2010年7月9日）、第399号「新武蔵野物語に出てくる東京天文台」（2010年12月4日）、第400号「三鷹移転の頃の東京天文台が登場する「新武蔵野物語」」（2010年12月5日）の6回の記事がある。第304号に書いてあるように、これは現在の観山正見台長から東京天文台が登場する小説の類を蒐集したらどうかという言葉に従って収集を始めていた。

このたび、アーカイブ室新聞の読者で、岡山天体物理観測所の65cmクーデ型太陽望遠鏡のマグネトグラフ、乗鞍コロナ観測所の25cmクーデ型コロナグラフで観測したことがあるという川上新吾氏から、東京天文台が登場するという2件の小説の情報が寄せられた。さっそく買い求めたのが表記の「金環食」（松本清張）（写真1）が掲載されている「憎悪の依頼」（松本清張）である。



写真1 「金環食」が掲載された文庫本

この小説は、新聞記者が昭和23年（1948年）5月9日に北海道礼文島であった金環食の観測報告会に向かうところから始まる。小説は事実を書く必要はないと見え、日食があったのは昭和23年3月だと書いてあるが、実際には5月9日であった。また東京天文台の何

人かの名前が登場するが本名ではなく、別の名前で書かれている。実際の観測に出かけた東京天文台のメンバーは、当時の台長であった萩原雄祐、他、下保茂、橘実、大沢清輝、秦茂、中野三郎、虎尾正久、河野節夫、藤井繁、そして観測地は礼文島、観測は直接写真で行われ、周縁減光、接触時刻、経緯度測定が行われたと記録にある。

この日食観測には日本隊の他にアメリカからも観測隊が来ていたが、日本は独自の計算で日食帯の予報位置の中心線が 600m ずれているとの結果を得ており、アメリカ隊との距離が 600m 南北の方向にずれていたのである。そしてこの日食の日食帯は南北に 1~1.2km ほどしかなく、日本隊が食帯の中心線上にあれば、アメリカ隊の観測位置は食帯から外れる恐れがあったのである。結果は日本隊が食中心で観測し、アメリカ隊は食帯の端っこの方で何とか観測に成功したというものであった。

このことは、東京天文台 90 周年記念誌に「掩蔽観測から推定される鉛直線偏倚の量は、日本の測地座標(東経, 北緯)に対し、約-20 “、+10” の補正を必要とする。この大きな補正值は、前記の日本の掩蔽観測の不調和を説明するとともに、朝鮮, 満州国境線に見られる大きな測地座標のくい違いをも説明するものであった。また昭和 23 年(1948)の礼文島の日食の幅僅か 1km の中心帯の位置の予報にもこのことが考慮され、よく観測と一致した。これらが契機となって、測地問題と、月の位置追跡の精度を上げるために掩蔽の光電管観測が開拓された。」という記述がある。

この記事にあるように、日本の掩蔽観測による結果が従来測地座標では日食帯からずれるとの予報が導かれ、日本の観測によって得られた値を信用して観測地を設けて観測に成功したのであった。この予報を出したのは広瀬秀雄博士であったと伝えられている。

小説には、日本の計算による予報位置の方がアメリカの予報より勝っていたという記事を書いた新聞が、戦勝国であるアメリカより日本が勝っているという記事に「敗戦国が戦勝国を侮辱する気か!」という進駐軍の怒りとなって表れて、その記事を書いた記者が地方に飛ばされるという内容である。

こういった純粋に学術結果にも軍が文句を言ったというところを取り上げ小説にしたということだろう。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp